

ヤングケアラー
学校関係者向けアンケート調査
結果報告書

目 次

| | |
|------------------------------------|----------|
| 調査の概要 | 3 |
| 調査の目的 | 3 |
| 調査の方法 | 3 |
| 報告書の留意点 | 3 |
| 集計結果 | 4 |
| I. 基本情報 | 4 |
| II. ヤングケアラーについて | 5 |
| III. 現在関わっている子どもについて..... | 6 |
| IV. 過去に関わっていた子どもについて..... | 8 |
| V. 最も注視している（印象に残っている）子どもについて | 10 |
| VI. 支援についてのご意見 | 33 |

調査の概要

調査の目的

本調査は、日頃子どもと接する時間の長い区内の学校関係者を対象に、職務や諸活動を通じて、把握されている状況等についてうかがい、今後のヤングケアラーへの支援体制整備検討のための参考とするために実施したものです。

調査の方法

(1) 調査対象

区立小中学校及び義務教育学校の教職員等、学校関係者

(2) 調査時期

令和4年6月15日(水)～7月19日(火)

(3) 調査方法

区立小中学校及び義務教育学校を通じて配付・回収

(4) 回答数

1,195部

報告書の留意点

- 「調査結果」の図表は、原則として回答者の構成比(百分率)で表現しています。
- 「n」は、「Number of case」の略で、構成比算出の母数を示しています。
- 百分率による集計では、回答者数(該当設問においては該当者数)を100%として算出し、小数点以下第2位を四捨五入し、小数点以下第1位までを表記します。
- 複数回答(2つ以上選ぶ問)の設問では、すべての割合の合計が100%を超えることがあります。
- 図表中の「0.0」は四捨五入の結果又は回答者が皆無であることを表します。
- 図表の記載にあたり調査票の設問文、グラフ及び文章中の選択肢を一部簡略化している場合があります。
- クロス集計は分析軸の無回答は除いています。そのため、全体のn数と合計が合わない場合があります。
- クロス集計グラフでは、見やすさを優先し「0.0%」の数値表示を省略しているものがあります。

集計結果

I. 基本情報

問1. あなたの職名を教えてください。

回答者の職名については、「教諭」が951人（79.6%）と最も多く、次いで「その他」が57人（4.8%）、「副校長」が50人（4.2%）、「養護教諭」が45人（3.8%）となっています。

| 職名 | 人数 | 割合 |
|---------------|------|-------|
| 校長 | 39人 | 3.3% |
| 副校長 | 50人 | 4.2% |
| 教諭（講師含む）※1 | 951人 | 79.6% |
| 養護教諭※2 | 45人 | 3.8% |
| スクールソーシャルワーカー | 4人 | 0.3% |
| スクールカウンセラー | 23人 | 1.9% |
| 指導主事 | 10人 | 0.8% |
| その他 | 57人 | 4.8% |
| 無回答 | 16人 | 1.3% |

※1：教諭（講師含む）には、主幹教諭・主任教諭を含みます。

「その他」のうち、特別支援専門員や非常勤講師など講師に該当する記載のあったものは「教諭（講師含む）」に含めて集計しています。

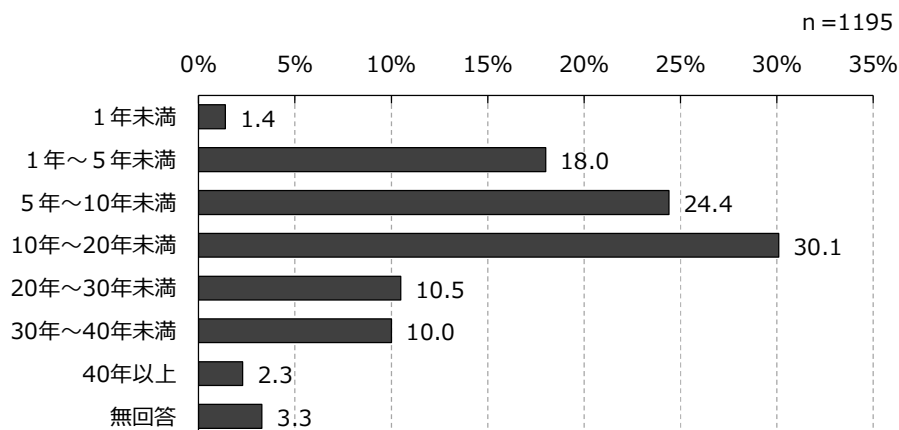
※2：養護教諭には、主幹養護教諭・主任養護教諭を含みます。

その他の主な回答

- ・学校地域コーディネーター
- ・スクールサポートスタッフ
- ・事務
- ・巡回相談員 など

問2. あなたの教員歴（SSW・SCの方は経験年数）を教えてください。

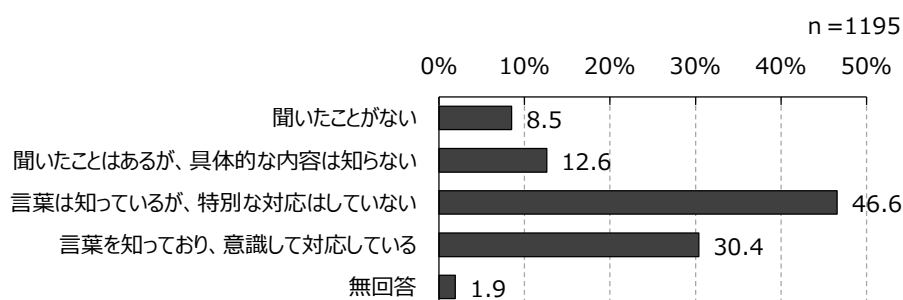
教員歴（経験年数）は、「10年～20年未満」が30.1%と最も多く、次いで「5年～10年未満」が24.4%、「1年～5年未満」が18.0%、「20年～30年未満」が10.5%、「30年～40年未満」が10.0%となっています。



Ⅱ. ヤングケアラーについて

問3. あなたは「ヤングケアラー」についてご存じですか。

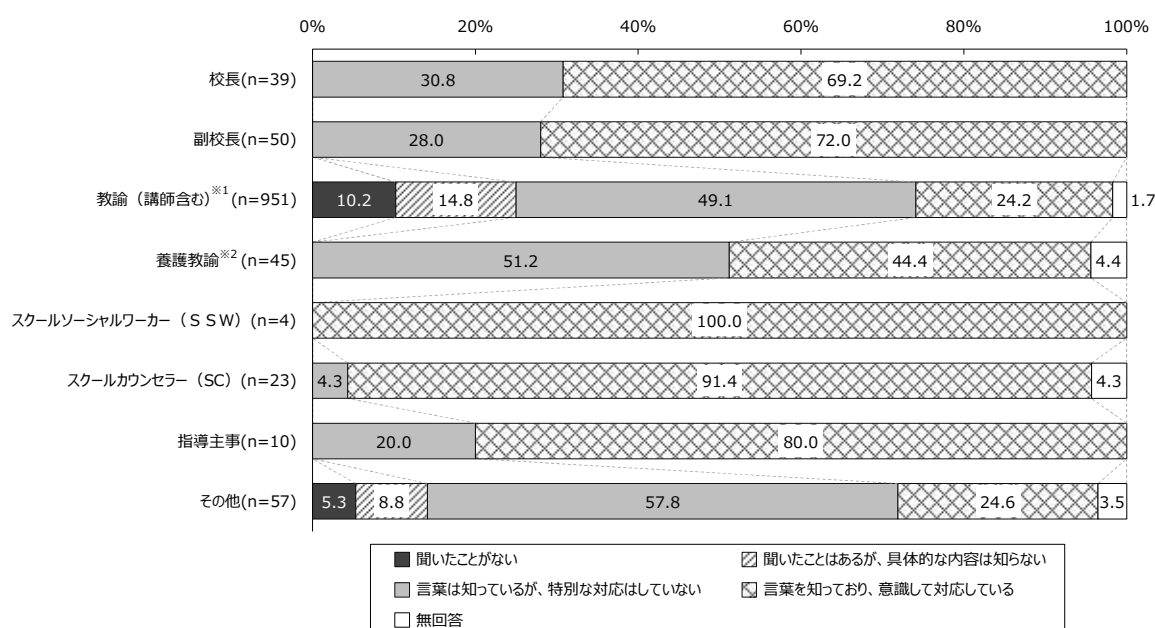
ヤングケアラーの認知については、「言葉は知っているが、特別な対応はしていない」が46.6%と最も多く、次いで「言葉を知っており、意識して対応している」が30.4%、「聞いたことはあるが、具体的な内容は知らない」が12.6%、「聞いたことがない」が8.5%となっています。



【職名別クロス集計】

職名別でみると、教諭（講師含む）で7割以上が認知している一方、10.2%が「聞いたことがない」、14.8%が「聞いたことはあるが、具体的な内容は知らない」と回答しており、さらなる周知・啓発が必要と考えられます。

また、「言葉を知っており、意識して対応している」と回答している割合は校長、副校長、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、指導主事で高くなっていますが、日頃子どもたちと接する時間が長い教諭（講師含む）や養護教諭は「言葉は知っているが、特別な対応はしていない」割合が約5割となっており、ヤングケアラーへの関わり方や、必要な支援へのつなぎ方に対して課題を抱えていることがうかがえます。



※1：教諭（講師含む）には、主幹教諭・主任教諭を含む。

※2：養護教諭には、主幹養護教諭・主任養護教諭を含む。

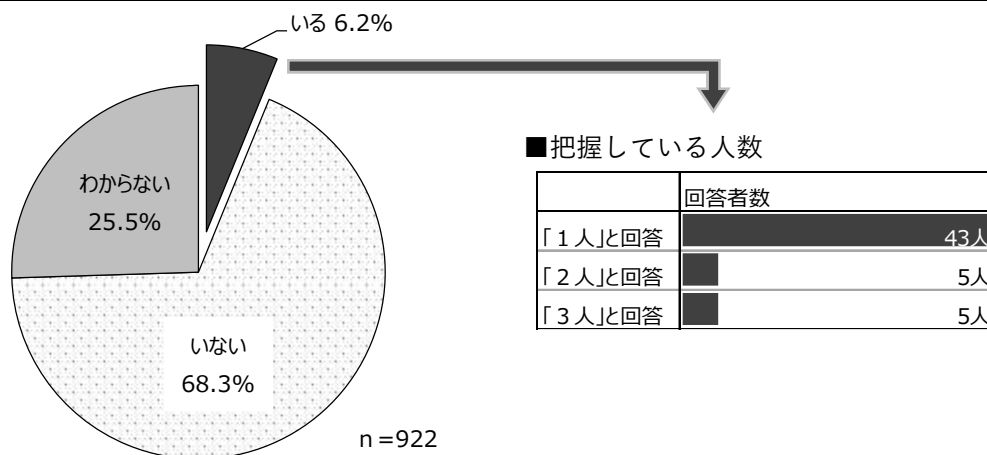
Ⅲ. 現在関わっている子どもについて

問4. 現在（今年度）、あなたが関わっている児童・生徒の中でヤングケアラーと思われる子どもはいますか。

（1）自分が担任をしているクラスの中にいますか。

今年度、自分の担任するクラスの中にヤングケアラーと思われる子どもがいるかについて、「いない」が68.3%、「わからない」が25.5%、「いる」が6.2%となっています。

また、「いる」と回答した人にその人数を聞いたところ、「1人」と回答したのは43人、「2人」及び「3人」と回答したのは5人となっています。

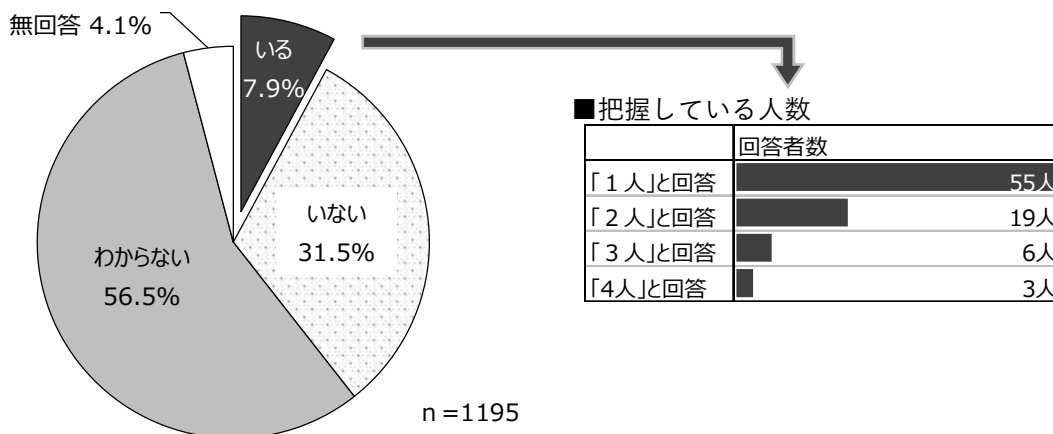


※担任を持っている教員のみでの回答となります。

（2）自分が担任をしていないクラスの中にいますか。

今年度、自分が担任をしていないクラスの中にヤングケアラーと思われる子どもがいるかについて、「わからない」が56.5%、「いない」が31.5%、「いる」が7.9%となっています。

また、「いる」との回答した人にその人数を聞いたところ、「1人」と回答したのは55人、「2人」と回答したのは19人、「3人」と回答したのは6人、「4人」と回答したのは3人となっています。

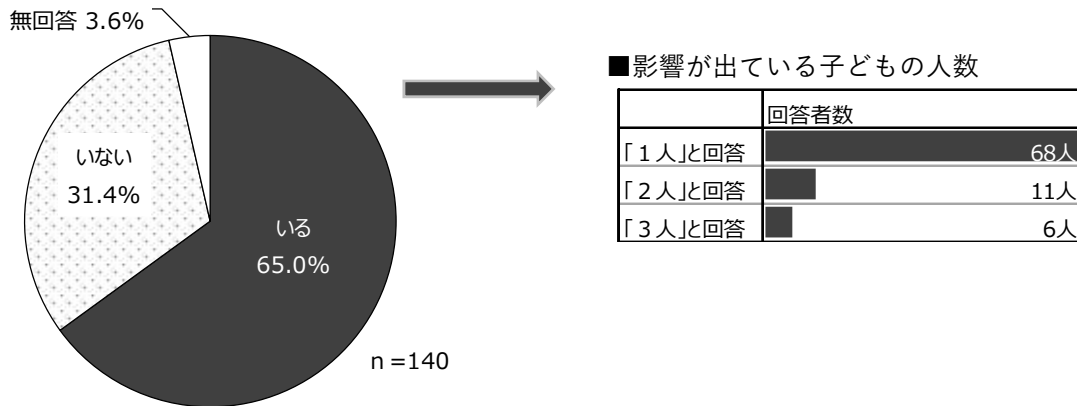


問4 (1) 又は (2) で「1.いる」と回答した方にうかがいます

問4-1. その児童・生徒の中に、学校生活に影響が出ている子どもはいますか。

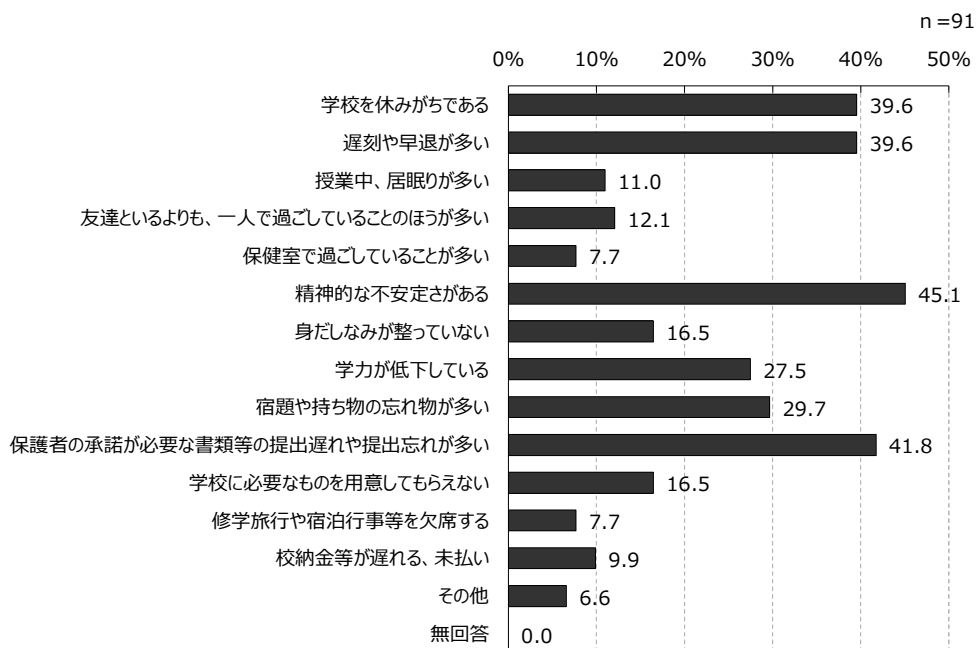
担任をしている、していないに関わらず、ヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した人に学校生活に影響の出ている子どもがいるか聞いたところ、65.0%が「いる」と回答しています。

また、「いる」と回答した人にその人数を聞いたところ、「1人」と回答したのは68人、「2人」と回答したのは11人、「3人」と回答したのは6人となっています。



問4-2. その児童・生徒は学校生活に以下のような影響は出ていますか。(複数回答)

ヤングケアラーと思われる子どもがいると回答した人に子どもに出ている学校生活の影響を聞いたところ、「精神的な不安定さがある」が45.1%と最も多く、次いで「保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い」が41.8%、「学校を休みがちである」及び「遅刻や早退が多い」が39.6%、「授業中、居眠りが多い」が11.0%、「友達というよりも、一人で過ごしていることのほうが多い」が12.1%、「保健室で過ごしていることが多い」が7.7%、「身だしなみが整っていない」が16.5%、「学力が低下している」が27.5%、「宿題や持ち物の忘れ物が多い」が29.7%、「学力が低下している」が27.5%となっています。

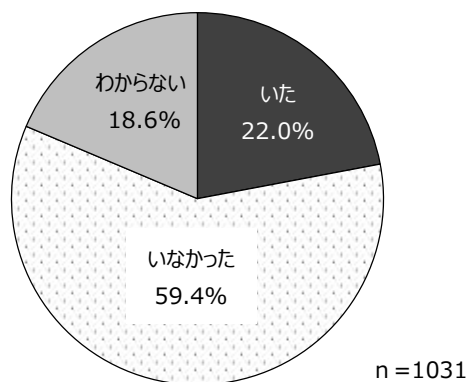


IV. 過去に関わっていた子どもについて

問5. 過去に（昨年度までに）、あなたが関わっていた児童・生徒の中でヤングケアラーと思われる子どもはいましたか。

（1）自分が担任をしていたクラスの中にいましたか。

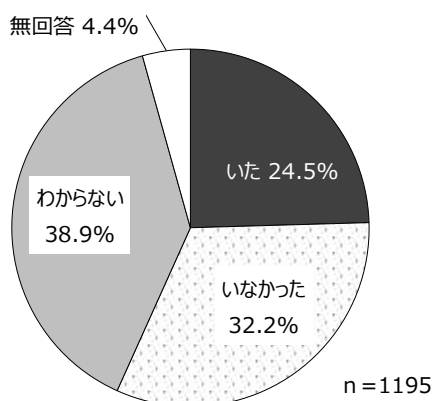
過去に、自分の担任するクラスの中にヤングケアラーと思われる子どもがいたかについて、「いなかった」が59.4%、「いた」が22.0%、「わからない」が18.6%となっています。



※担任を持っていた教員のみでの回答となります。

（2）自分が担任をしていないクラスの中にいましたか。

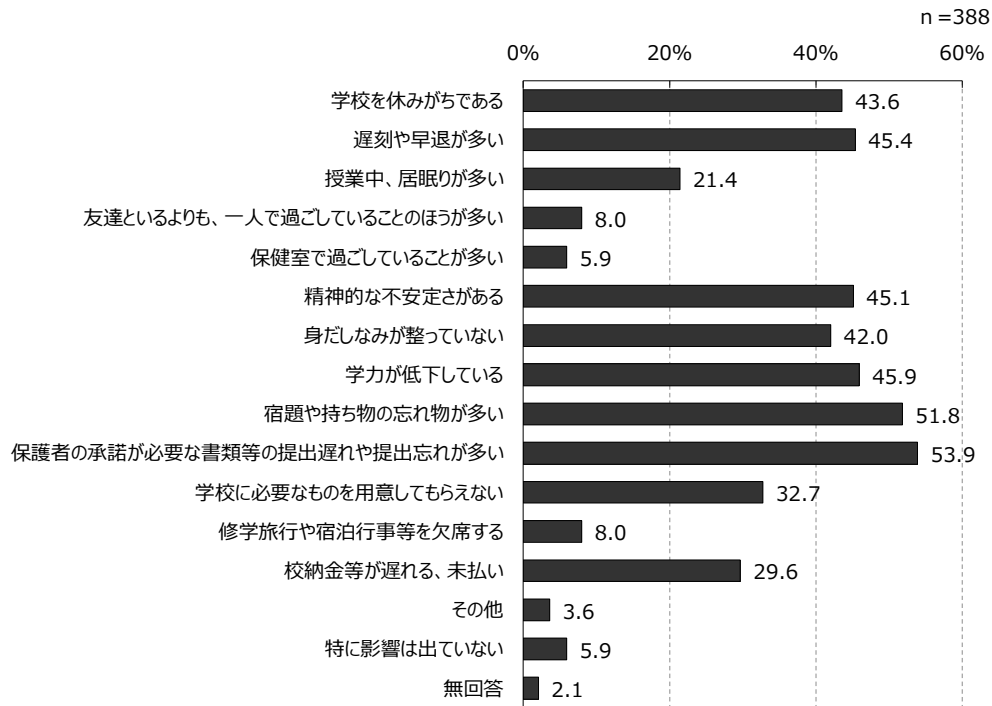
過去に、自分が担任をしていないクラスの中にヤングケアラーと思われる子どもがいたかについて、「わからない」が38.9%、「いなかった」が32.2%、「いた」が24.5%となっています。



問5 (1) 又は (2) で「1.いた」と回答した方にうかがいます

問5-1. その児童・生徒は学校生活に以下のような影響は出ていましたか。(複数回答)

過去に、担任をしていた、していないに関わらず、ヤングケアラーと思われる子どもが「いた」と回答した人に、その子どもに出ていた学校生活の影響を聞いたところ、「保護者の承諾が必要な書類等の提出遅れや提出忘れが多い」が53.9%と最も多く、次いで「宿題や持ち物の忘れ物が多い」が51.8%、「学力が低下している」が45.9%、「遅刻や早退が多い」が45.4%、「精神的な不安定さがある」が45.1%となっています。

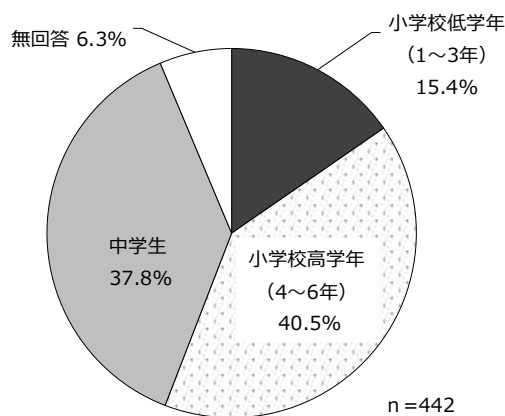


V. 最も注視している（印象に残っている）子どもについて

問4と問5で「1. いる」「1. いた」と回答いただいた中で、最も印象的な児童・生徒についてうかがいます。

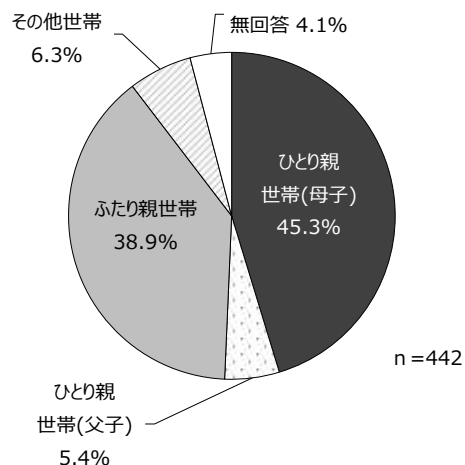
問6. その児童・生徒は何年生ですか（過去の場合は、その時何年生でしたか）。

現在（今年度）、過去（昨年度までに）に担任をしている、していないに関わらず、ヤングケアラーと思われる子どもがいる（いた）と回答した人に最も印象に残っている子どもの学年を聞いたところ、「小学校高学年（4～6年）」が40.5%、「中学生」が37.8%、「小学校低学年（1～3年）」が15.4%となっています。



問7. その児童・生徒の家族構成について教えてください。

現在（今年度）、過去（昨年度までに）に担任をしている、していないに関わらず、ヤングケアラーと思われる子どもがいる（いた）と回答した人に最も印象に残っている子どもの家族構成の回答から世帯構成を判定したところ「ひとり親世帯(母子)」が45.3%、「ひとり親世帯(父子)」が5.4%、「ふたり親世帯」が38.9%、「その他世帯」が6.3%と「ひとり親世帯」の割合が半数を占めています。



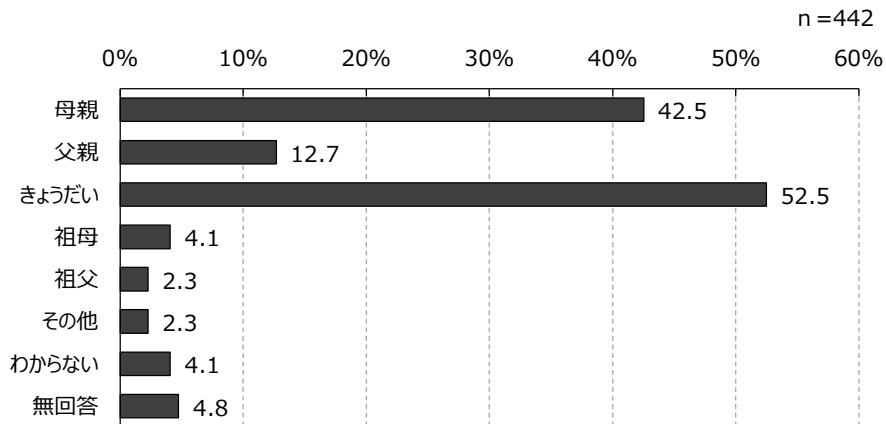
その他世帯の主な回答

・母の兄弟姉妹 ・おじ ・甥 ・姪 など同居の世帯

問8. ケアを必要としている人（複数回答）

現在（今年度）、過去（昨年度までに）に担任をしている、していないに関わらず、ヤングケアラーと思われる子どもがいる（いた）と回答した人に最も印象に残っている子どもについてケアを必要としている人が誰かをについて聞いたところ、「きょうだい」が52.5%と最も多く、次いで「母親」が42.5%、「父親」が12.7%、「祖母」及び「わからない」が4.1%となっています。

また、「母親」と「きょうだい」や「母親」「父親」と「きょうだい」など複数の家族をケアしている子どももみられました。

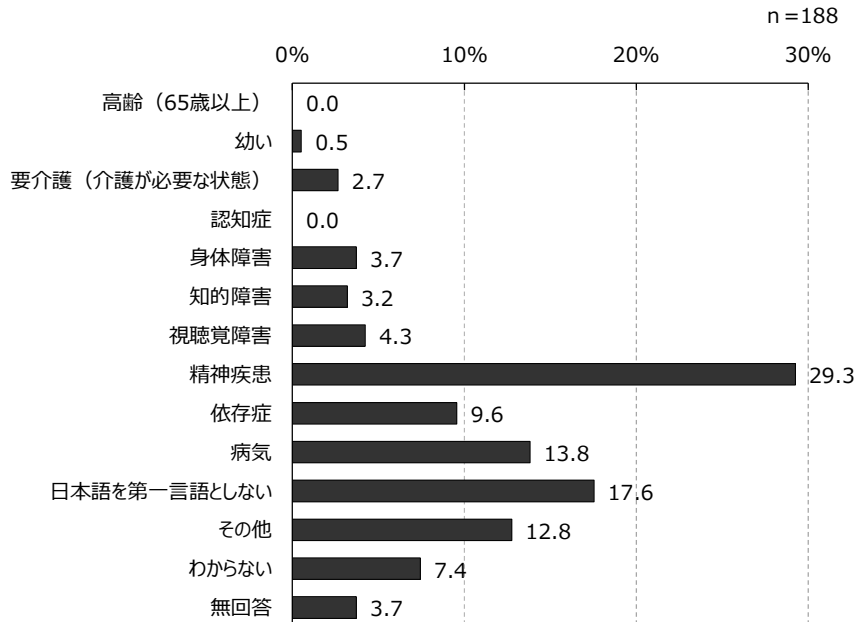


その他の主な回答

・甥 ・姪 ・従姉妹 ・おじ ・親戚

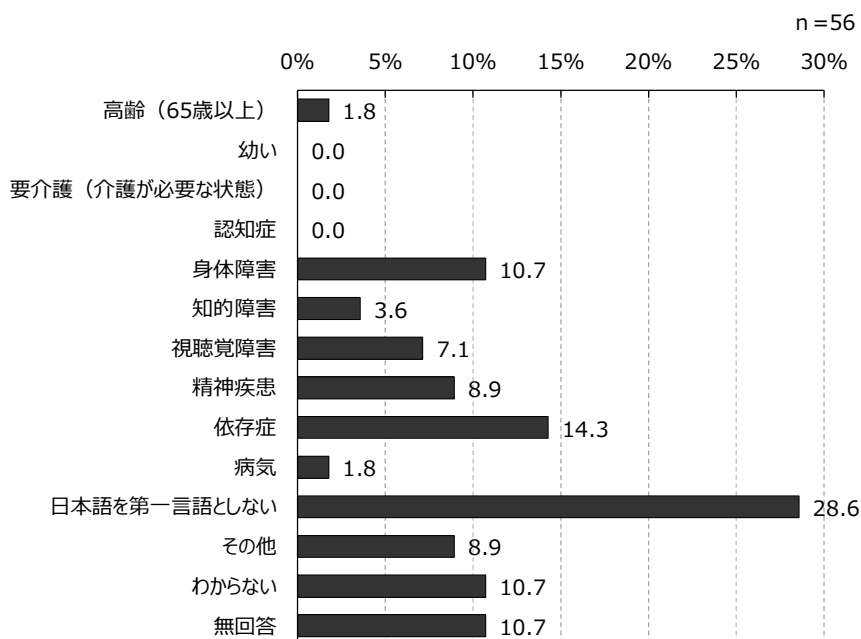
問8. その人の状態/1. 母親 (複数回答)

ケアが必要な母親の状態は、「精神疾患」が29.3%と最も多く、次いで「日本語を第一言語としない」が17.6%、「病気」が13.8%、「その他」が12.8%、「依存症」が9.6%となっています。



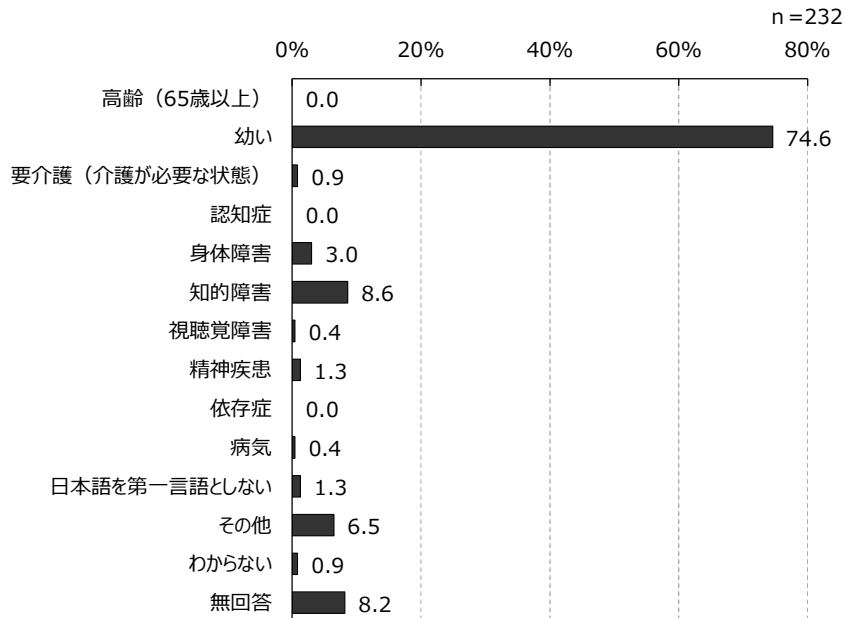
問8. その人の状態/2. 父親 (複数回答)

ケアが必要な父親の状態は、「日本語を第一言語としない」が28.6%と最も多く、次いで「依存症」が14.3%、「身体障害」及び「わからない」が10.7%、「精神疾患」及び「その他」が8.9%となっています。



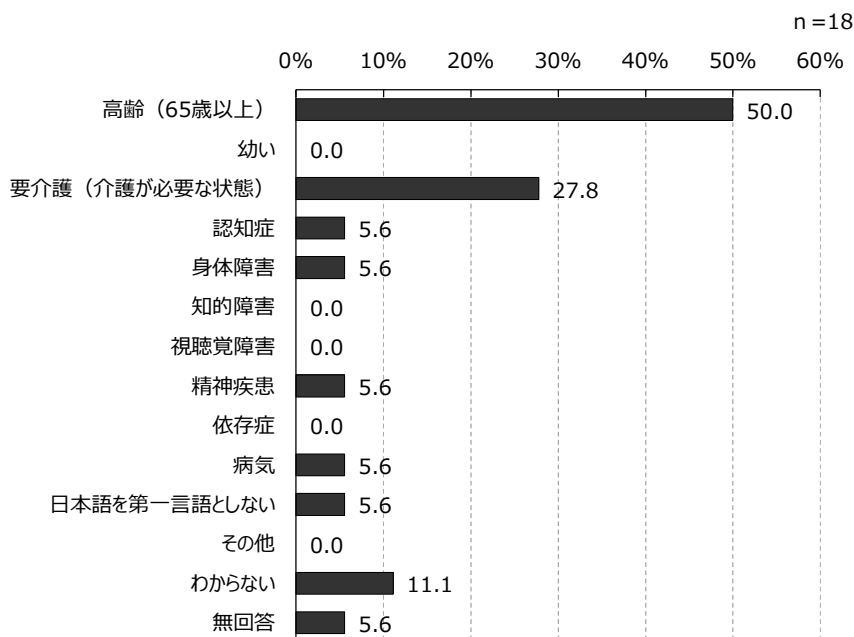
問8. その人の状態／3. きょうだい（複数回答）

ケアが必要なきょうだいの状態は、「若い」が74.6%と最も多く、次いで「知的障害」が8.6%、「その他」が6.5%、「身体障害」が3.0%、「精神疾患」及び「日本語を第一言語としない」が1.3%となっています。



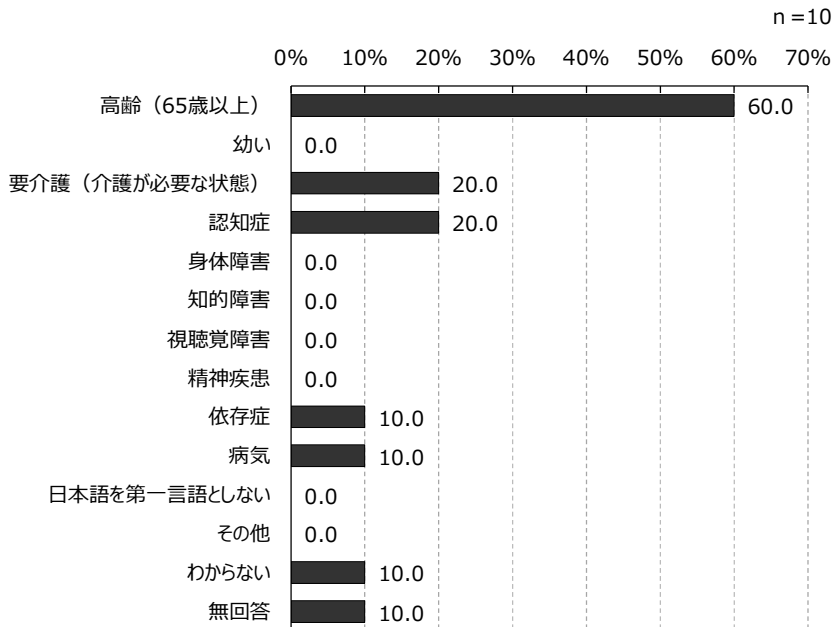
問8. その人の状態／4. 祖母（複数回答）

ケアが必要な祖母の状態は、「高齢 (65歳以上)」が50.0%と最も多く、次いで「要介護 (介護が必要な状態)」が27.8%、「わからない」が11.1%、「認知症」、「身体障害」、「精神疾患」、「病気」、「日本語を第一言語としない」が同率で5.6%となっています。



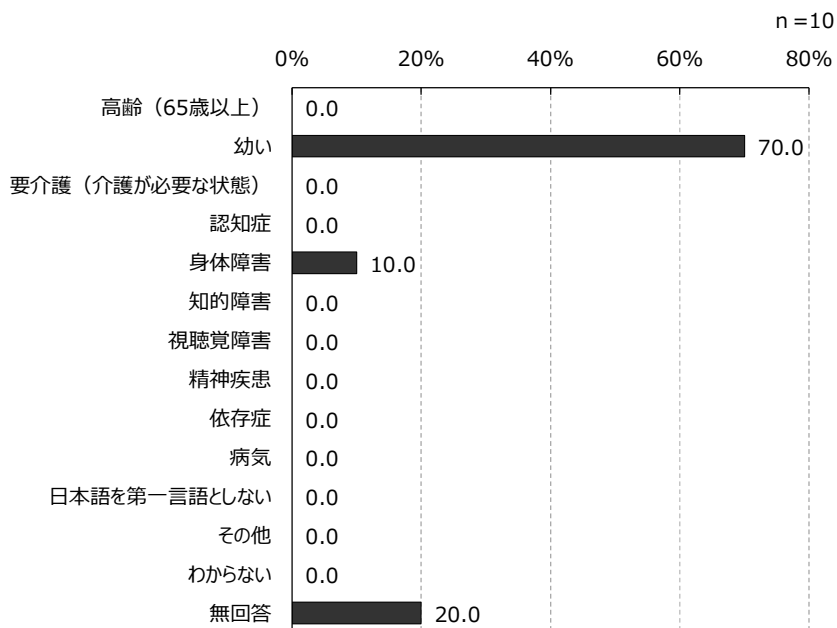
問8. その人の状態／5. 祖父（複数回答）

ケアが必要な祖父の状態は、「高齢（65歳以上）」が60.0%と最も多く、次いで「要介護（介護が必要な状態）」及び「認知症」が20.0%、「依存症」、「病気」、「わからない」が同率で10.0%となっています。



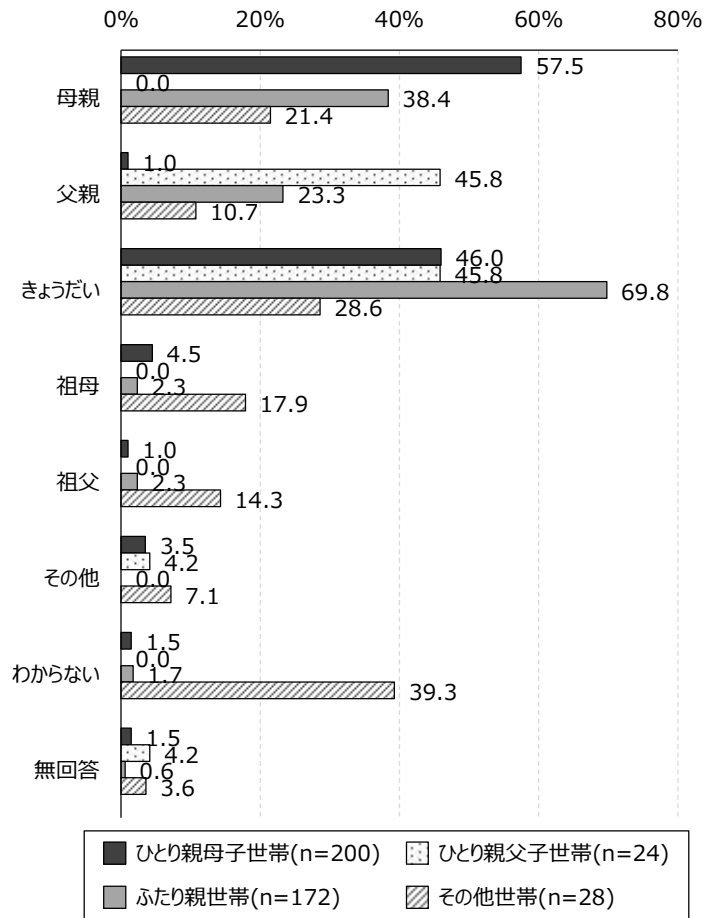
問8. その人の状態／6. その他（複数回答）

ケアが必要なその他の状態は、「若い」が70.0%、「身体障害」が10.0%となっています。



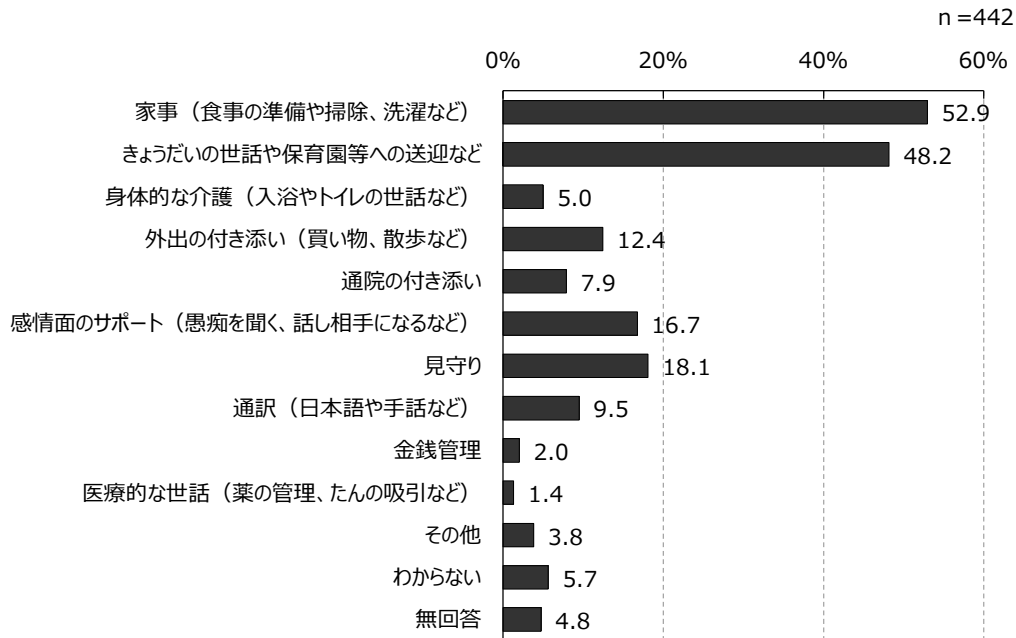
【世帯構成別：ケアを必要としている人】

ケアを必要としている人を世帯構成別にみると、ひとり親世帯（母子）では、「母親」の割合が約6割と高く、ふたり親世帯では、「きょうだい」の割合が約7割と高くなっています。



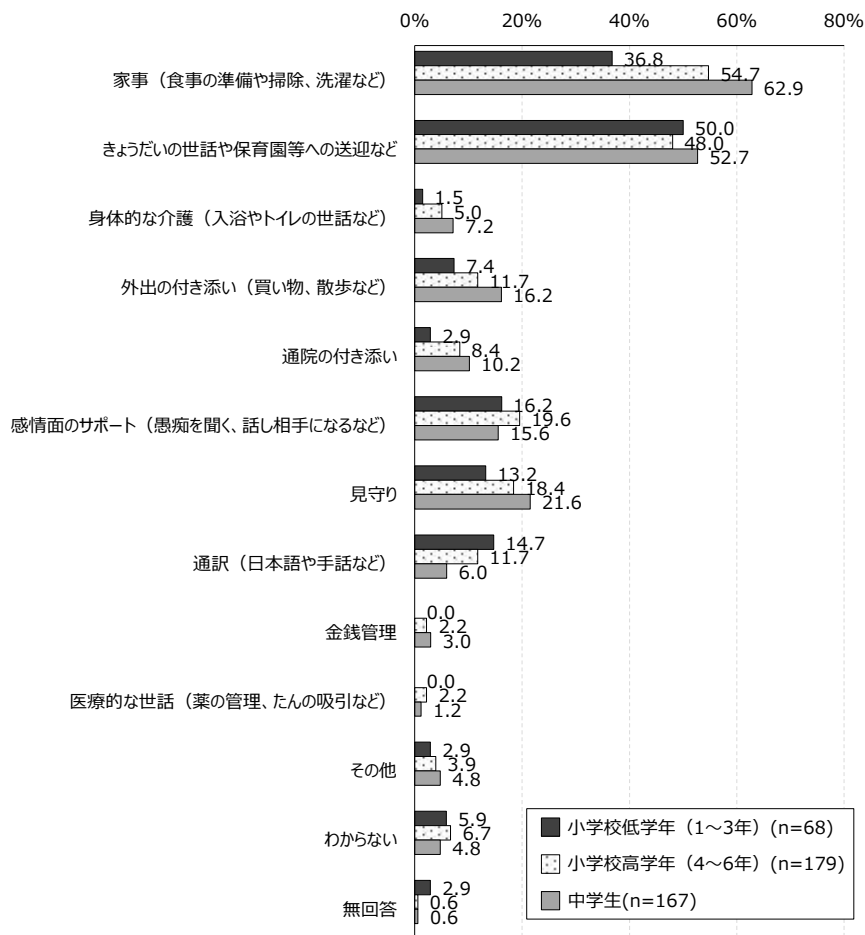
問9. その児童・生徒が行っている（行っていた）ケアは何ですか。（複数回答）

子どもがしている（していた）ケアの内容については、「家事（食事の準備や掃除、洗濯など）」が52.9%と最も多く、次いで「きょうだいの世話や保育園等への送迎など」が48.2%、「見守り」が18.1%、「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」が16.7%、「外出の付き添い（買い物、散歩など）」が12.4%となっています。



【学年別：ケアの内容】

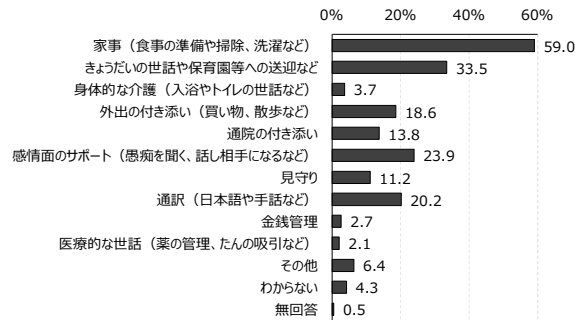
子どもがしている（していた）ケアの内容を学年別にみると、「きょうだいの世話や保育園等への送迎など」は各学年とも約5割の子どもが行っており、「家事（食事の準備や掃除、洗濯など）」などほとんどのケアの内容は学年が上がるにつれ割合が高くなる傾向がみられますが、「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」は学年に関わらず2割弱が行っており、「通訳（日本語や手話など）」は学年が上がるにつれ割合が低くなっています。



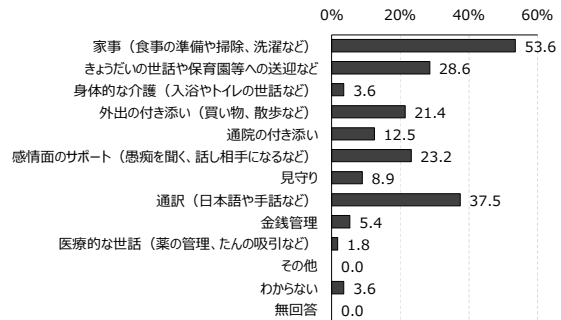
【ケアが必要な人別：ケアの内容】

子どもがしている（していた）ケアの内容をケアが必要な人別にみると、いずれも「家事（食事の準備や掃除、洗濯など）」の割合が比較的高くなっており、母親にケアが必要な場合には家事のほか、「きょうだいの世話や保育園等への送迎など」や「感情面のサポート（愚痴を聞く、話し相手になるなど）」の割合が高く、父親にケアが必要な場合には「通訳（日本語や手話など）」や「きょうだいの世話や保育園等への送迎など」の割合が高くなっています。

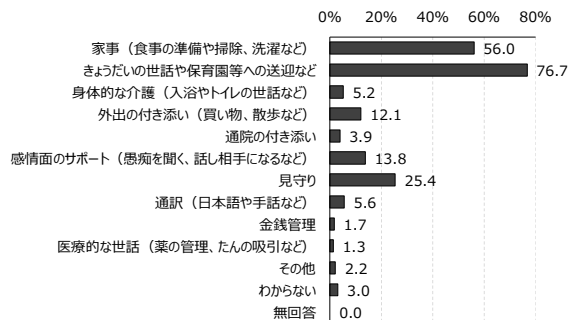
母親(n=188)



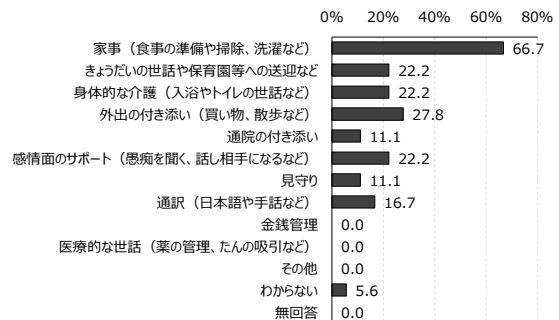
父親(n=56)



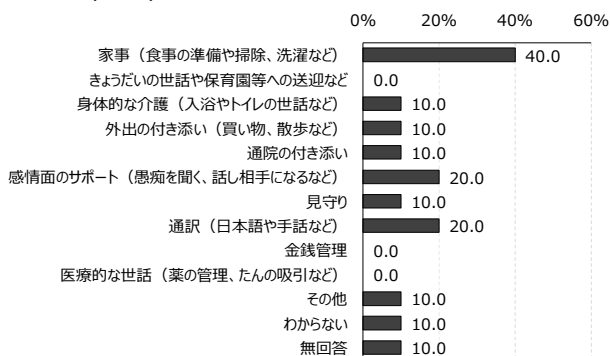
きょうだい(n=232)



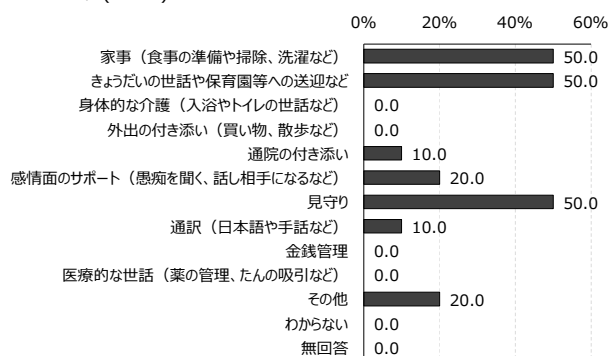
祖母(n=18)



祖父(n=10)



その他(n=10)



問10. その児童・生徒が家族等をケアしていること（していたこと）に、どのようにして気づきましたか。（記述回答）

子どもがケアをしていることに気づいたきっかけについて、388人から回答がありました。内容をいくつかの項目にまとめた主な意見は以下のとおりです。

子どもとの会話

- ・子どもが直接教えてくれた。
- ・生徒本人との面談の中で、弟の面倒を生徒が見ていることを知った。
- ・日常的な本人からの話。
- ・保健室に来て、本人が話した。相談を受けていた。

保育園・小学校・中学校や他の機関からの引継ぎ（校内会議含む）

- ・小学校からの申し送り。
- ・進級時の引き継ぎ。
- ・前担任からの引き継ぎ。
- ・担任からの情報共有。
- ・転入児童だったので、関係する教員内で周知された。
- ・保育園からの引き継ぎ。
- ・学年の情報共有。
- ・兄弟と関わっている外部の方からの話。

家庭訪問・面談

- ・担任が家庭訪問をして。
- ・家庭訪問した際に、母親も体調が良くないことを知った。
- ・家庭訪問でお母さんが簡単な日本語しか会話できないことに気づいた。お父さんも日本語がカタコトで、本人もカタコト。国語を中心とする学力の低さからそう感じた。
- ・三者面談の際に、日本語で会話できず、生徒本人が母親の母語で通訳していた。
- ・個人面談で母とコミュニケーションがとれない。
- ・父親との面談にて知った。

保護者や家族から

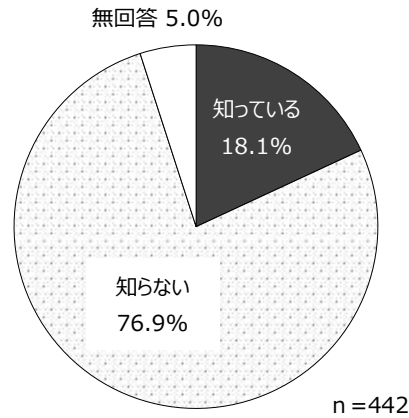
- ・保護者が、下の子の面倒を見るために早退させに来たことがあった。
- ・保護者との面談や本人との会話の中で、状況を把握した。また祖母は積極的に家庭の状況を学校に知らせてくれた。
- ・母親から相談。
- ・祖母からの情報提供。

学校生活への影響から

- ・遅刻、居眠り、忘れ物が多く、本児に理由を聞いている中で、本児から聞き取った。
- ・登校が遅く、迎えに行ったとき。
- ・不可解な欠席が続いた。
- ・忘れものが多く書類が提出されないため。
- ・連絡なしの欠席。
- ・服装が清潔ではない。
- ・欠席が多かった。(病気ではないのに)
- ・衣服が汚れていたことに担任が気づき、聞き取りを行った。

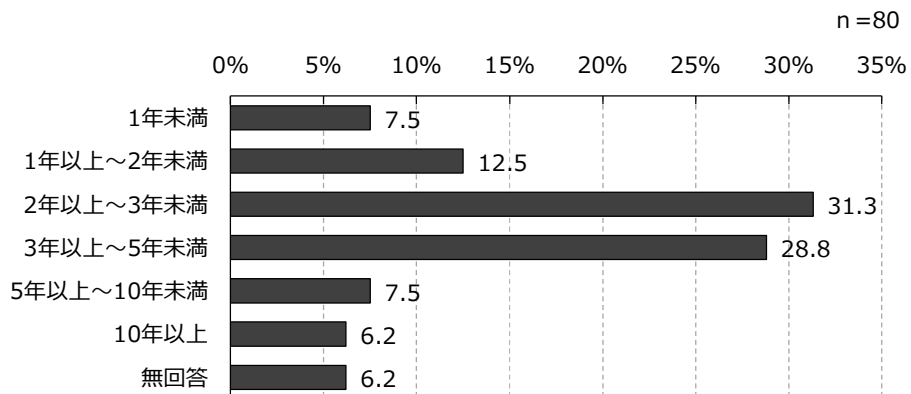
問11. その児童・生徒はどのくらいの期間、家族のケアをしているか（していたか）知っていますか。

子どもがどのくらいの期間ケアを行っているかを「知っている」が18.1%、「知らない」が76.9%となっています。



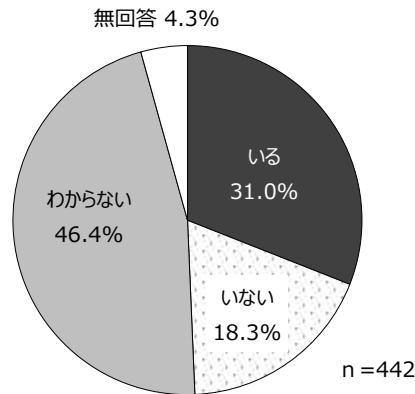
ケアの期間

子どもが行っているケアの期間を知っていると回答した人にその期間を聞いたところ、「2年以上～3年未満」が31.3%と最も多く、次いで「3年以上～5年未満」が28.8%、「1年以上～2年未満」が12.5%、「1年未満」及び「5年以上～10年未満」が7.5%となっています。



問12. その児童・生徒のほかに、その家族を支援している人はいますか（いましたか）。

ケアをしている子どものほかに、支援している家族がいるかについて、「いる」が31.0%、「いない」が18.3%となっていますが、「わからない」との回答が46.4%で最も多くなっています。



問12で「1.いる」と回答した方にうかがいます

問12-1. その人は誰ですか。ご存じの範囲で教えてください。（記述回答）

ケアをしている子どものほかに、支援している人が「いる」と回答した人に誰が支援しているか聞いたところ、133人から回答がありました。家族・親族、関係機関、その他に分類した主な意見は以下のとおりです。

家族・親族

- ・ 親戚、祖母。
- ・ 祖父母。
- ・ 双子の妹。
- ・ 父親・兄弟。

関係機関

- ・ 学校、HEARTS、民生・児童委員など。
- ・ 子ども家庭支援センター、保健所、児童相談所、パルレ（ら・るーと）、フリースペース。
- ・ 区の子育てに関する機関はすべて関わっていた。
- ・ 弁護士、HEARTS、民生・児童委員、子ども家庭支援センター、児童相談所。
- ・ 民生委員。

その他

- ・ 近隣にお住まいの方、（母の友人）。
- ・ ボランティア。
- ・ 同じブラジルの集まりの方。
- ・ 地域住民。

問13. その児童・生徒の学校生活への影響について、お気づきになったことを具体的に教えてください。(記述回答)

ケアをしている子どもの学校生活への影響について、253人から回答がありました。内容をいくつかの項目にまとめた主な意見は以下のとおりです。

遅刻・欠席

- ・遅刻が多い。(きょうだいを迎えの車に送るためとの情報だった)
- ・欠席、遅刻が多い。
- ・欠席が多い。連絡なしのことがほとんど。
- ・長期の不登校。
- ・下の兄弟の面倒を見るために学校を欠席していた。
- ・欠席が多く、家庭への連絡も困難。

身だしなみ

- ・衛生面に課題。
- ・服装がいつも同じ。
- ・衣服が汚れていたり、姉妹で同じものを着まわしたりしていた。
- ・サイズが小さくなった服を着ている。
- ・身だしなみが整っていない。

学習面

- ・午後の授業は居眠りをしている。
- ・本人の学習する時間が取れない。
- ・学習に身が入らない。
- ・学習習慣が身につけていない。授業中姿勢が悪く、寝ていることもある。
- ・公園で遊ぶなど色々な経験が少なく、学習面に影響していた。
- ・知的な遅れもあり、学習についていけず、学校に来たがらない。
- ・授業中に眠そうにしている。

忘れ物

- ・忘れ物が多く、学習道具などそろわないことがある。
- ・学習用具がそろわず、欠席も多いため、学びが定着しない。
- ・持ち物がそろわない。
- ・宿題などが忘れがちだった。

提出物の遅れ

- ・提出物が出ない。
- ・学校書類の内容が理解できず、提出物等が遅れる。

精神面

- ・イライラしている。
- ・精神的な負担が大きい。
- ・ストレスでまゆ毛を抜く。
- ・とにかく、情緒が不安定だった。
- ・メンタルケアが必要。
- ・家で父親からよく叱責されているとのことで、自己評価の低さは若干感じられる。
- ・感情の起伏が激しく、とても甘えてきたり、とても怖い表情で何も話さなかったり、波があった。
- ・やる気やモチベーションが低下。
- ・自分に自信がもてない。不安感が強い。
- ・精神的に不安定だった。孤独感を感じていた。
- ・基本的に寝不足で、終始イライラしていることが多い。

栄養面

- ・ごはんを食べていない。
- ・コンビニ弁当ばかりでお弁当を作ってもらえていない。
- ・元気で登校しており学習も頑張っている様子だったが、食事がとれていないようだった。
- ・朝食をとっていない。

問14. その状況にあなたがどのように対応したかを教えてください。(記述回答)

子どもがケアをしている状況にどのように対応したかについて、265人から回答がありました。「関係機関との連携」「保護者・本人への対応」「校内での対応」「対応できなかった」の4つの項目にまとめた主な意見は以下のとおりです。

関係機関との連携

- ・ HEARTS との定期的な関わり。
- ・ HEARTS に報告し、子ども家庭支援センターと連携してもらうように依頼した。
- ・ HEARTS も関わっていたが、なかなか状況の改善が見られなかった。
- ・ 子ども家庭支援センターとの情報共有を行った。
- ・ 民生委員、区の子育てサポートにつなげた。
- ・ ケース会議を児童相談所中心に実施した。
- ・ HEARTS との関わりを増やすために、家庭・本人からの連絡を働きかけているが、家庭からの連絡が難しい。
- ・ 近隣から児相にネグレクトということで報告有。児童相談所と連携はしたが、外国籍の家庭ということで、うまく対応できなかった。
- ・ 児童相談所、子ども家庭支援センターと連携し定期面談と見守りを行った。

保護者・本人への対応

- ・ 親のカウンセリング。(校内での)
- ・ 特別支援教室では不安を傾聴し、心理的安定をはかった。
- ・ 何回か母親と面談した。家庭訪問も実施した。
- ・ その子の好きなマンガやゲームを話題にコミュニケーションをとった。
- ・ とにかく、話を聞き、親とも話をしていく。
- ・ 家事の仕方(掃除・洗濯機・簡単な料理)を教えた。
- ・ 在学時は登校できていたので、給食をしっかりと食べさせていた。連絡帳で保護者とこまめにやりとりをしていた。
- ・ 実態に合わせて宿題の量を調整した。
- ・ 日頃から、声かけをするように心掛けた。

校内での対応

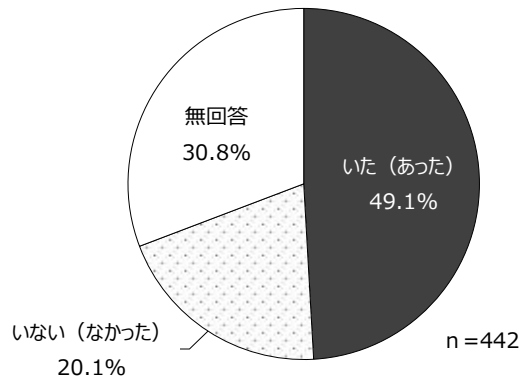
- ・ 教職員をはじめ、校内委員会や生活指導部会でも情報共有をして、校内での支援体制を整えている。
- ・ ヤングケアラーの情報提供を学校に行き、本人の指導だけでなく保護者も含めて対策を考えた。
- ・ 外国人家庭に対し、英語(ALT)の先生に協力してもらい、連絡を英語で行った。
- ・ 学校を中心に様々な機関と連携して支援しているが、なかなか改善されない。
- ・ 管理職に報告した。

対応できなかった

- ・ すごく目立つわけではなかったので見守った。
- ・ 対応する方法がわからなかった。保護者に連絡しないでほしい（母が登校を促されること
にあせりを感じるため）と強く言われ、なかなか連絡を取ることができなかった。
- ・ 担任ではなかったので、対応しようがなかった。
- ・ 担任と情報を共有し、特別な対応はせず、他の児童と同じように接していた。（そのように
お願いされた）

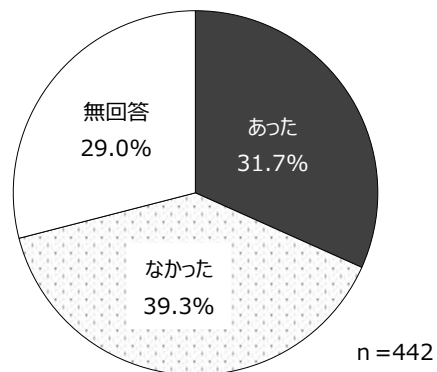
問15. その時にあなたが相談できる相手や場所がありましたか。いた（あった）場合は具体的に教えてください。

相談できる相手や場所があるかについては、「いた（あった）」が49.1%、「いない（なかった）」が20.1%となっています。



問16. その時に他の機関との連携はありましたか。

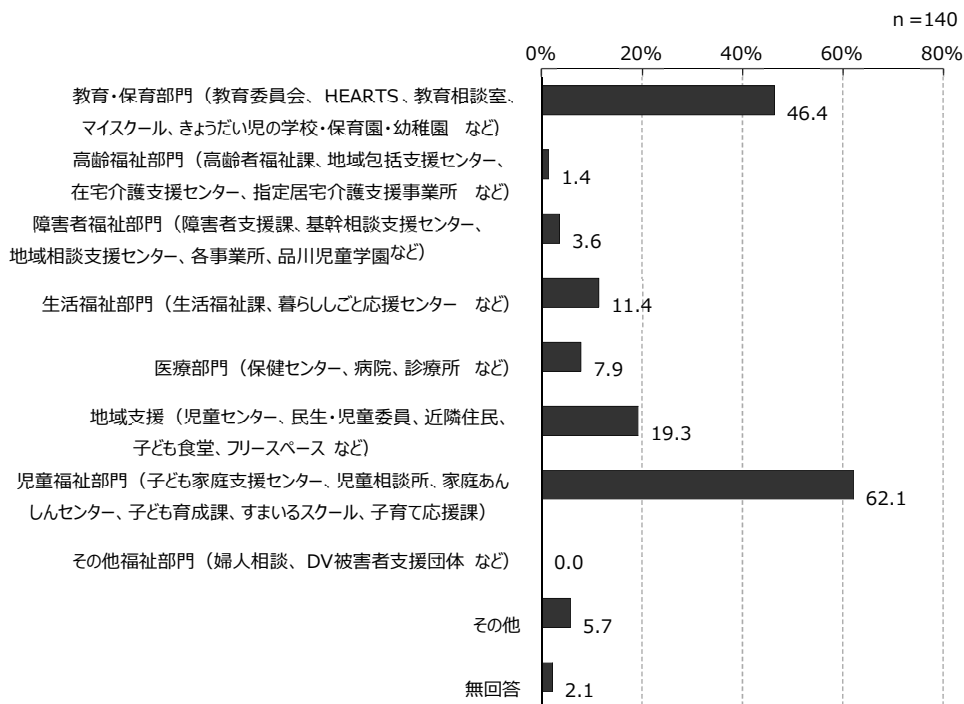
学校以外の機関との連携については、「あった」が31.7%、「なかった」が39.3%となっています。



問16で「1.あった」と回答した方にうかがいます

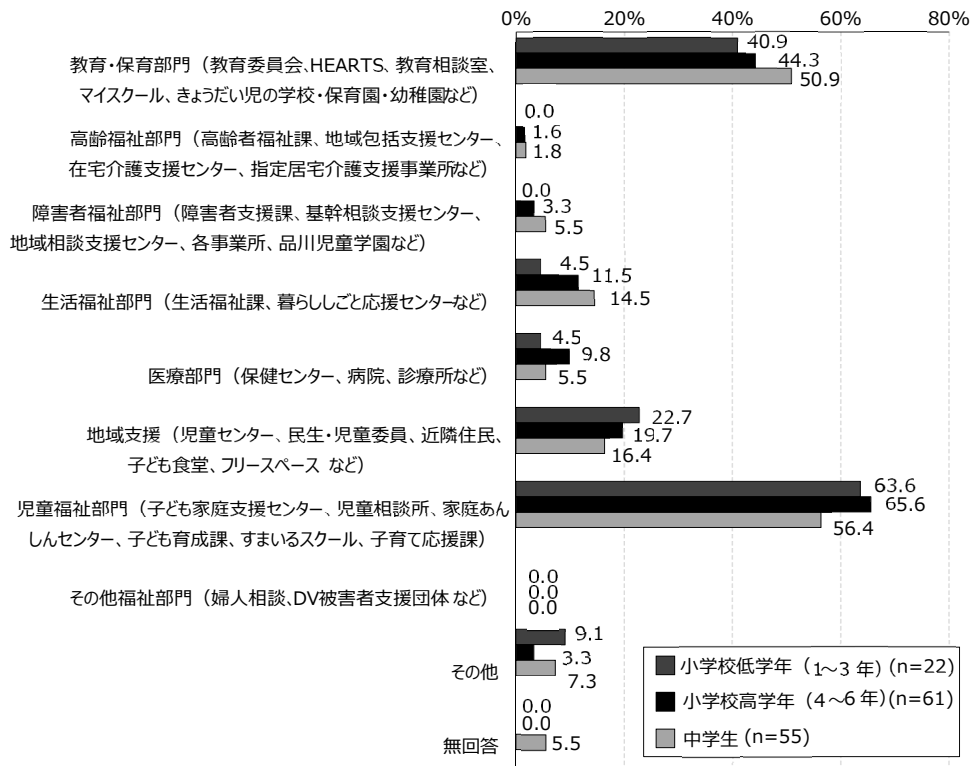
問16-1.どのような機関と連携がありましたか。(複数回答)

学校以外の機関との連携が「あった」と回答した人にどのような機関と連携があったかを聞いたところ、「児童福祉部門（子ども家庭支援センター、児童相談所、家庭あんしんセンター、子ども育成課、すまいるスクール、子育て応援課）」が62.1%と最も多く、次いで「教育・保育部門（教育委員会、HEARTS、教育相談室、マイスクール、きょうだい児の学校・保育園・幼稚園など）」が46.4%、「地域支援（児童センター、民生・児童委員、近隣住民、子ども食堂、フリースペースなど）」が19.3%、「生活福祉部門（生活福祉課、暮らししごと応援センターなど）」が11.4%、「医療部門（保健センター、病院、診療所など）」が7.9%となっています。



【学年別：連携のあった機関】

連携のあった機関を学年別にみると、いずれの学年も「児童福祉部門」が最も高くなっていますが、「教育・保育部門」、「生活福祉部門」は学年が上がるにつれ割合が高く、反対に「地域支援」は学年が上がるにつれ割合が低くなっています。



問16-2どのような連携があったか、連携方法について具体的に教えてください。

(記述回答)

具体的な連携方法について、101人から回答のあった主な意見は以下のとおりです。

- ・情報の共有やケース会議。
- ・子ども家庭支援センターの担当との定期的な連絡。児童相談所からの情報提供及び情報共有。児童館（児童センター）、就学前施設との情報共有。
- ・児童相談所との話し合い、子ども家庭支援センターとの情報共有。
- ・児童相談所に家庭訪問をしてもらい、生活面でのサポートや、助言をしてもらった。
- ・児童相談所と学校が連携して情報交換を行い、介入方法について検討した。
- ・手話通訳をお願いするなどをした。
- ・生活福祉課から区が提携している通訳ボランティアを紹介された。
- ・民生委員から家庭の状況について情報を伝えてもらい、注視してもらったとともに、児童相談所には母へのアプローチをしてもらった。
- ・相互の情報交換・共有。それによる各機関ができることの再確認および実行。
- ・家庭あんしんセンターで相談として話を聞いてもらった。
- ・児童委員に見回りをしてもらった。
- ・HEARTS に相談した。

問 17. その児童・生徒と関わる上で困ったこと、苦勞したことがあれば教えてください。

(記述回答)

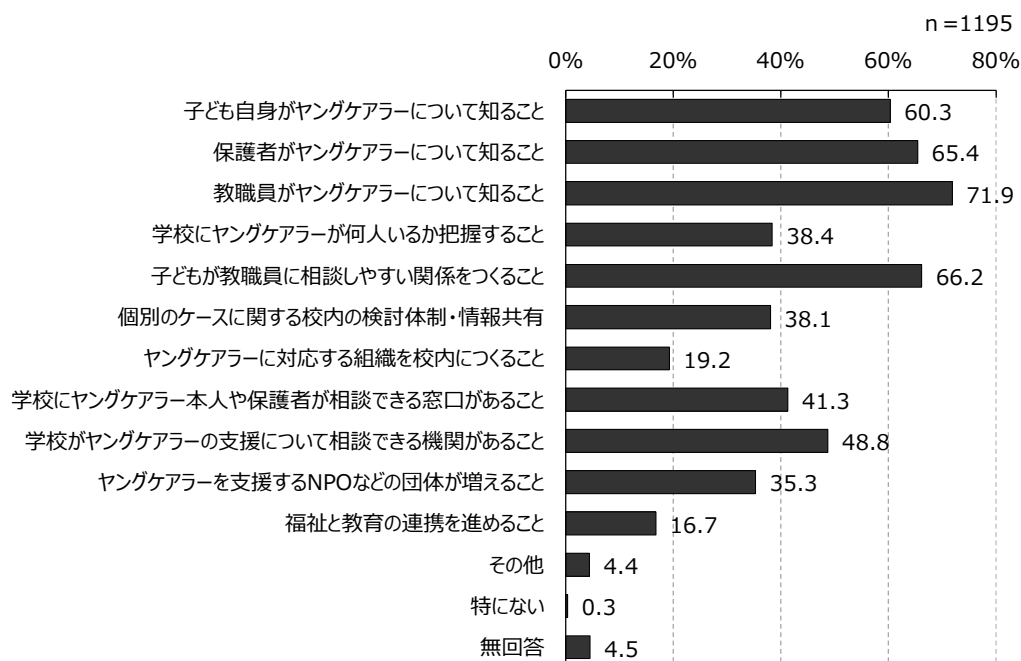
子どもと関わる上で困ったこと、苦勞したことについて、回答のあった182人の主な意見は以下のとおりです。

- ・本人がなかなか状況を伝えようとしない。心配してほしくないと感じているようで介入しづらい。どこまで助けられるかわからないのに気軽に踏み込めない。
- ・家庭の中のことには踏み込んでほしくない雰囲気があり、あまり話すことができなかった。
- ・アプローチが難しい。今は、学校に何でも話をしてくれているが、壁をつくられないように意識している。
- ・困っていることを自覚していない状況。
- ・精神的な部分を支えること。
- ・愛情不足がひどく、クラスで対応するにはとても手が足りなかった。
- ・自分がヤングケアラーである、被虐待状態であることの意識がなかったこと。
- ・感情表現がなく、話を聞くまでは困っていなさそうだった。他の子と比較することもなく、やらなければならないという気持ちでやっていたようで、どう対応するべきか困った。
- ・母親に伝えたくても直接伝えられない状況に苦しんだ。
- ・保護者との連絡が取れなかった。
- ・日本語でコミュニケーションがとれず、簡単な英語でしか関われなかった。
- ・母親からの理解・協力を得られなかった。
- ・生徒本人と信頼関係が持てても、そのことに対し、母親が悪く捉えてしまい、母親とはうまく関係性が持てなかった。
- ・現在は玄関先までしか入れない。
- ・家庭内の問題が大きかったので、口を出しづらかった。
- ・家庭のことなので、どこまで介入してよいのかそのラインがわからなかった。
- ・「お金」の話はどうにもならない。本人も前向きになったり、あきらめてしまったりをくり返していた。
- ・他の教員が知らないこと。引き継ぎもないこと。

VI. 支援についてのご意見

問18. ヤングケアラーを支援するために、必要だと思うことはどのようなことですか。
(複数回答)

ヤングケアラーを支援するために、必要だと思うことについては、「教職員がヤングケアラーについて知ること」が71.9%と最も多く、次いで「子どもが教職員に相談しやすい関係をつくること」が66.2%、「保護者がヤングケアラーについて知ること」が65.4%、「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」が60.3%、「学校がヤングケアラーの支援について相談できる機関があること」が48.8%となっています。



問19. 小学生・中学生が家族のケアをするために、自分の学業や友達付き合い、部活などに大きな影響が出ていることを知った場合、あなたは教職員としてどのようなサポートができると思いますか。また、どのような支援が役立つと思いますか。

あなたのお考えを自由にお書きください。(記述回答)

教職員としてできると思うサポート、役立つと思う支援について、754人から回答がありました。「本人・保護者へのサポート」「関係機関との連携」「校内での支援」の3つの項目にまとめた主な意見は以下のとおりです。

本人・保護者へのサポート

- ・「話を聞く」ということを徹底することで、生徒の不安な気持ちを受けとめてあげる。
- ・まずは声をかける。話を聞いてあげる。がんばっていることについて褒め、困っていることがないか、いつでも相談にのることを伝える。
- ・一番は、溜まっているものを吐き出せる場をつくること。周りになかなか話すことができなく、ストレスをためたり、悩みを抱えたりしていることもあるので、話を好きなだけ話せる場をつくってあげることが大切。
- ・家庭の事情をまず聞いて把握すること。その後、その子のためにできることをたくさんの教員で考えたり、専門家に聞いたり、使える機関を紹介することで、少しでもその子の負担が減るように導いていくことだと思う。
- ・子どもが自分の状況を客観的に理解し、誰かに助けを求めてよいということを伝える。
- ・子どもに寄り添い話を聞く。
- ・子どもと何でも話せる関係を築いていく。
- ・まずは子どもの状態をよく観察して早期発見に努める。その子にとって、心の支えになれる人を探す。
- ・学業においては、休み時間や放課後などに、相談や補習を行うことができる考える。
- ・学校でできること(宿題や各教科の課題)のサポートをする。保護者と密に連絡を取り、学校でできそうなサポートの相談をする。
- ・子どもたちに、「現状があたりまえではない」ことを知ってもらう学びを提供していく。
- ・子ども自身が自分自身の状況に気づけるよう、話す機会がもてるよう、子ども自身が情報を知る機会が大事だと思う。また、保護者にも認識、意識をもってもらうことが必要であり、何らかの機会をもちたい。支援機関があればつながりたい。
- ・生徒がひとりで抱え込んでしまわないように、相談できる場所があるということを伝える。
- ・保護者と話し、現在の生徒の状態について共有する。もし可能なら専門機関に相談に行ってもらおう。
- ・保護者の方や、学校の教職員と情報を共有する。可能であれば、相談できる機関を探すなど、一緒に考えて対応策を探すことはできると思う。
- ・子ども自身の生活を保障するため、登校できる環境、安心して子どもらしく生活できる環境を整える。子どもがSOSを出せる関係づくりを行い、具体的なアドバイスができるようにしていく。
- ・通訳ソフトの無料貸出や通訳同席での面談システムの充実。

関係機関との連携

- ・ 関係機関と連携し、本人や保護者が安心して、相談できる場の提供が求められる。
- ・ 関連の専門家につなぐのが一番だと考える。
- ・ 教育・福祉・医療の連携。公的なものだけでなく、民間の事業、施設の利用も考えられる。
- ・ 組織全体で共有する。
- ・ 組織、外部機関と連携を図りながら対応していくことがまずは大切だと思う。
- ・ 外部のサポート機関等に連絡し、支援をお願いする。
- ・ 区や NPO 法人などの他機関につなげ、適切な支援を受けられるようにすること。
- ・ 子ども家庭支援センターや児童相談所などに連絡をし、連携しながらサポートをしたい。
- ・ ケアが必要な家族のケアをしてくれるような機関や施設を増やすことが支援につながるのではないと思う。
- ・ 民生委員、子ども家庭支援センター・家庭あんしんセンター、児童相談所などの機関と連携し、家庭を支える対策をとる。

校内での支援

- ・ ヤングケアラーについての知識を得ること。まずは、どのようなケースが該当するのかを知ること。
- ・ 家庭で困ったことがあった際には、学校に相談できる場と関係を整備すること。
- ・ 校内での情報共有、対応についての共通理解を持つこと。
- ・ 校内での研修によって教職員同士で共通理解を持つ。
- ・ 学校では相談したり話しかけやすい環境づくりをする。
- ・ 校内で情報共有を図り、複数の大人の目で見守ること。
- ・ 学校で学年会や生活指導部会、校内委員会で取り上げ、関係機関につなげ、対策する。学校でできること（オンライン授業や、課題の提出、SC との相談など）を検討する。

学校での対応の限界

- ・ 学校ができる範囲には限界がある（家に入り、家族のことを見たりして、子どもの負担を減らす等）。この限界を超えて支援ができる機関が必要だと思う。とにかく、子どもの負担軽減についての支援を考えることが重要だと思う。
- ・ 学校で家庭に介入することには限界があると思うので、福祉との連携を強め、福祉の力を使うことが求められると思う。
- ・ 教員がどれだけ家庭に関われるのかが不明なことと、教員の仕事がまた増加することの恐れがある。
- ・ 教職員として話を聞く、外部への橋渡しをすることはできるが、多忙すぎて学校での対応は現状不可能で専門機関へつなぐのが精一杯である。「子どもに関すること = 学校で対応」には限界がある。

- ・学校は教育機関であるので、行政が中心になって対応してほしい。児童生徒のためにできる限りのことをしてあげたいが、現状の業務量で対応するのは難しい。
- ・子どもが安心して本音を言える信頼関係を築けることは大事だと思うが、学校単体では解決できない。学校や福祉サービスなどを結びつけて支援につながる担い手が必要と考える。
- ・家庭の事情に介入するのは、本来の教員の役割ではない。本人の進路や学習のサポートしかしてはいけないと思っている。教員にサポートを期待するのではなく、福祉でサポートできるように時間はかかってもしていくべきだと思う。